

2025 年度事業計画

いわゆるコロナ禍に伴う行動制限などは本年度、各方面でほぼ解消され、社会活動や経済行動、教育活動が以前の状態を取りもどしつつある 1 年でした。そのおかげもあり、当財団にとってかねてからの懸案事項だった収支相償問題を無事に解決することが出来ました。加えて、祖業である論文事業においては、減少していた論文応募数が反転し、増加傾向にあります。この論文事業を大切に、当財団として引き続き来年度も継続して注力して参ります。

コロナ禍から学んだ「直接お会いして、お邪魔して、直に見て言葉を交わすことの重要性」を改めて認識し現場を支える先生や保育者の方々とつながり、一方では、従来の取り組みを漫然と継続するのではなく、しっかりと検証活動を行い、内容の Update や新しい取り組みへ再構築することも積極的に検討し、取り組んで参ります。またその際、財団の事業継続性という側面も踏まえながら、内部体制の再構築も並行して併せて取り組んで参ります。

日本の教育・保育界を取り巻く問題は非常に幅広く、年を追うごとに複雑化しています。教師・保育者数の不足やモチベーションの課題、労働環境、学力格差の拡大、、、。こうした諸々の問題のうち、ソニー教育財団が世に対して貢献できる領域、内容にフォーカスしながら、これまで大切にしてきた「科学する心を育てる」保育と「科学が好きな子どもを育てる」教育の原点に立ち返り、子ども達の明るい未来を育むための事業を展開して参ります。

【公 1】 科学教育を中心とし、乳幼児と児童生徒の豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す事業

教育実践論文募集をベースとした本事業は、当財団の主幹事業であり、論文主題に沿った教育・保育実践論文（学校・園対象）と教育実践計画（学校教員対象）を募集し、優れたものを選定し、その学校・園、教員個人に対し、助成を行うものです。また、助成するにとどまらず、その実践をベストプラクティスとして、他校・他園に紹介し、ともに研鑽していくことを目的としています。

1. 乳幼児教育（ソニー幼児教育支援プログラム）

本プログラムは幼稚園・保育所・こども園を対象に、主題「科学する心を育てる」の保育実践論文を募るもので、創設から 22 年目を迎えた 2024 年度には、この事業に 2 つの大きな変化がありました。まず 1 つ目は、最優秀園の助成金を 200 万円から 300 万円へと引き上げました。その他の入選助成金もすべて増額し、65 年の歴史をもつ“小・中学校対象”の教育実践論文の助成金額と“完全に統一”しました。助成金の増額は、未来を生きる子どもたちのために研究を重ねられる園へのご支援はもちろん、人間としての土台をつくる乳幼児期の大切さを、広く、多くの方々にご理解いただきたいという思いを込めています。2 つ目は、論文に記載できる実践の対象年齢を、1 歳から 0 歳に引き下げたことです。同時に、審査の観点も乳児期からの実践に対応すべく改訂し、乳児からの“生活”の広がり、育ちや発達の連続性などを盛り込んだ他、自然や命と共生しながら社会と関わるなど未来志向の“これからの”保育を意識した視点を取り入れました。こうした、財団の社会へのメッセージと、現状の保育に添う内容を盛り込んだ保育実践論文には、昨年より 27 件多い、148 園からのご応募をいただく結果となりました。2025 年度も、受賞園のベストプラクティスを発表会や事例集などを通じて広く社会に発信し、子ども一人一人に寄り添う「科学する心」の保育を広めて参ります。

（１）質の高い保育と研究の公開・学びの場の提供

「科学する心」を育てる優れた保育実践を広く公開するため、2025 年度は、最優秀園 2 園、審査委員特別賞 1 園の計 3 か所での「実践発表会（公開保育・研究会）」を予定します。園独自の研究発表に留まらず、行政や園の地域の小学校を巻き込んで共に発表したり、園の先生方と講師との対話形式でのディスカッションや、全員参加型のグループセッションを盛り込んだりするなど、保育者・教員が異なる視点から実践を学び、意見を述べ、学び合える“新たな”発表会となるよう、園ごとに検討を進めていきます。また、ここ数年、ソニー教育財団の「実践発表会」は好評を博し、募集開始から数日で定員に達してしまうことや、大学の教授など講師陣が参加者の数割を占めてしまうことを課題としており、保育現場の実践者である保育者、若手の先生のための交通費助成や、参加枠の確保などを予定しています。

（２）「科学する心を育てる」保育の発信強化

2004 年から毎年作成している『科学する心を育てる実践事例集』の発刊や、Web や SNS での保育実践の配信に加え、2025 年度は日本保育学会（約 5000 人が所属）が 5 月に開催する長野大会（6 年ぶりに対面にて実施）にブースを構えて、来場する保育関係者に対して直接、幼児教育支援活動の PR を行います。また、保育実践論文を書くことの楽しさや意義を共感し合う「科学する心を育てる Gathering（ギャザリング）」の実施回数を増やしたり、2024 年に新たに設けられた賞「奨励園 保育みらい賞」の園での、園周辺の地域・行政を巻き込んだ小規模イベントを計画したりするなど、「科学する心を育てる」保育の普及と発信を強化します。

２．子ども科学教育（ソニー科学教育プログラム）

本プログラムは小・中学校を対象とした「教育実践論文」と、小・中学校の教員個人を対象にした「未来へつなぐ教育計画」の二つの論文部門で構成されています。教育実践論文は「科学が好きな子どもを育てる」を主題に全教科等を対象とし、教育の実践と計画に関する論文を募集、優れた取り組みを進める学校に対して助成を行っています。また、未来へつなぐ教育計画は全教科等を対象に「将来、子どもたちが必要とされる資質・能力の育成」を設定し、その育成計画を募るものです。入選者にはその実践に向けた助成を用意しています。

（１）教育実践論文 応募数増加に向けた施策の展開

■周知活動の継続的な強化

ここ数年、応募数の減少傾向が続いていますが、今期は 91 校の応募があり、増加に転じました。ただ、小中学校の教員をとりまく複数の環境の変化（教科担任制の導入、働き方改革、中堅教員層の不足など）が論文応募の大きな足かせとなっている状況に変化はありません。2025 年度も財団事業の周知と理解を深めるイベント型の広報活動を積極的に展開する予定です。

（２）未来へつなぐ教育計画 さらに認知度アップによる応募数の増加

2024 年度で 4 度目の募集となった教育実践計画には 44 名の先生方から応募をいただきました。前期同様内容的にも資質や能力も多岐にわたるものが提案され、ユニークな実践計画が寄せられました。教育実践論文と同期して周知広報活動に努め、この論文部門を大切に育てたいと考えています。

（３）最優秀校のベストプラクティスをより広く共有できる仕組みづくり

■「子ども科学教育研究 全国大会」の企画運営

教育実践論文の最優秀校（小学校 1 校、中学校 1 校）による実践事例を発表いただく全国大会を 2024 年度は刈谷市立刈谷南中学校（愛知県）と福島市立三河台小学校（福島県）の 2 校において開催いたしました。刈谷南中学校では教科書にないオリジナリティあふれる授業や、三河台小学校の 3D プリンターを使った融雪型火山泥流の実験など、次代に理科教育の参考となる最優秀校のベストプラクティスが提示されました。また、ポスターセッションによる優秀校・入選者の発表は多岐にわたり、開催校の教員にとっても新たな学びの場になると評価されました。

2025 年度はすでに開催予定校である「福井大学附属義務教育学校（福井県）」と「射水市立片口小学校（富山県）」と検討を始めており、それぞれの学校・地域の個性に合った全国大会を開催する予定です。

【公２】科学教育を通じ、豊かな人間性確立と創造性の育成を目指す児童生徒対象の体験活動事業

この事業は子どもたちの内部にある「科学する心」を引き出し、大きく発揮できる体験を提供することで、「科学する心」の育ちにつなげることを目的としており、「ソニーものづくり教室」「科学の泉－子ども夢教室」の 2 つの事業で構成しています。

1. ソニーものづくり教室

公益財団法人の財務 3 原則の一つである収支相償に関する課題に配慮しながら、「ものづくり教室」を全国で展開して、多くの子ども達の科学への興味・関心を引き出すための活動を継続します。原資となる「ものづくり基金」のバランスも考慮に入れながら、適切な事業ボリュームで計画・実施をします。また、ソニーグループに所属する社員の参画を推進して、新しいコンテンツの開発も手掛けて参ります。

（１）ソニー事業所主催の「ものづくり教室」の開催

「ものづくり教室」は主としてソニーの事業所（工場）が、地域貢献活動の一環として開催しています。社員が講師となる対面の教室の開催は堅調で、2024 年度は東北・関東・九州地区などで合計 45 回実施、1026 名が参加しました（2023 年度：39 回実施、850 名参加）。2025 年度もこの活動の支援を継続し、より多くの子ども達の学びの機会を支援いたします。

（２）財団主催の「ものづくり教室」の開催

子ども達が科学への興味・関心を深めることを目的とした「ものづくり教室」は、2024 年度に 27 回実施、359 名が参加しました（2023 年度：21 回、350 名）。2025 年度は科学館をターゲットとして、首都圏だけでなく、北海道、青森県、新潟県、福島県など、これまで実施したことがない施設での開催も計画しています。同時に財団の思いを理解して一緒に開催をサポートして下さる施設との関係性を深め、一緒に学びの場を創出していきたいと考えます。また、実施メニューも増やして、新たに aibo のプログラミング、ピンホールカメラなども取り入れる計画です。

(3) ソニーグループ子会社等との連携による、財団理念を反映した運営

昨年度に引き続き、財団主催のワークショップでは、長年の実績がある大分県のソニー・太陽株式会社の協力を得ながら進めます。2025 年度は既存のコンテンツの内容を一部見直し、財団の理念がより伝わるように改変して実施します。また、同じく特例子会社であるソニー希望・光株式会社の社員も、講師やサポーターとして参画します。この2つの会社は井深大の信念を受け継いで、障がいの有無に関わらず、誰もがチャレンジできるような取り組みを目指しています。障がいがある社員であっても確実に業務遂行できるように配慮しつつ、子ども達にとっての学びをどう深めていくか、意見交換をしながら進めて参ります。

(4) 「ものづくり教室」の新コンテンツ開発

「ものづくり教室」の質を充実させるためには、新メニューの開発も課題です。2024 年度にはソニー・太陽に開発を委託した「マイクロホン」の原理試作が完成しました。これはソニー・太陽の音声技術を活かして、既存の工作キットである「紙コップスピーカー」の原理を応用して作られたものです。2025 年度には多くの子ども達が楽しめるように、キット化に関する検討を行います。また、ソニーセミコンダクタソリューションズグループの支援を得て、IoT 用ボードコンピュータ SPRESENSE を使った自動運転（プログラミング）の実施にも目途がつき、25 年度は公募によるワークショップの実施を計画しています。

2. 科学の泉－子ども夢教室

「科学の泉－子ども夢教室」は、『自然に学ぶ』をテーマに、ノーベル化学賞を受賞された博士が塾長として、自然豊かな場所で共同生活を伴う5泊6日の探求教室です。これまで15回に渡って開催し、卒塾生はこの経験を糧に様々な進路を選択して活躍しております。400名を超える卒塾生を輩出したこの教室ですが、2025年度も開催はせず、以下の理由で今後の方向性について検討いたします。

1. 塾長の志と意思を継ぐ後継者がおらず、長期的な継続が見込めないこと
2. 全国から塾生や指導員を集めた、長期宿泊を伴う活動計画が困難であること
3. 健康情報を含む個人情報の取得、取り扱いが厳格になり、管理が困難なこと

一方、卒塾生が集う交流会は継続して、社会人や大学生である卒塾生が中心となり、企画と運営ができるように支援して参ります。

【公3】 科学教育を中心とした教員の質的向上を目指す研究・研修等諸活動を支援する事業

財団の目指す「『科学する心』をはぐくみ、『科学が好きな子どもを育てる』」には、現場を預かる先生や保育者の方々が、これらの理念をしっかりと理解いただき、効果ある教育・保育をいかに実践していただくかが重要になります。財団の理念に共感し、ともに明日の教育・保育を考え、変革していく教員・保育者を発掘し、その支援を進めます。

1. 乳幼児教育

(1) 保育者ネットワーク（会員組織）の拡充

コロナ禍の2020年に発足した保育者の個人会員組織（乳幼児のための「科学する心」ネットワーク）は着実に会員数が増加し、2024年度末に1160名を超えました。ネットワークの存在が、ソニー教育財団と保育者、保育者同士のつながりを深めています。「科学する心を育てる保育」を共に学び合い、広めていくとともに、ソニー教育財団の主たる事業である「保育実践論文」の応募増加にもつなげていけるよう、組織の拡充に努めます。

ネットワーク会員がリアルで集まるオフ会「保育者の夏 Fesss！（フェス）」を、2025年度は8月に予定します。東京、兵庫と過去2回開催してきましたが、今年は7つの認定サークルの活動報告に加え、会員の先生方と一緒に、環境に特徴のある園を見学し、学び合う時間を設ける予定です。

一方、オンラインが主流であったコロナ禍が終わり、その後から2024年度にかけては、対面での学び合いに力を入れてきましたが、ネットワークの性質と、ヒアリングやアンケートの回答などから、オンラインイベントのニーズも高いこともわかってきました。そのため、2025年度は“会員限定”の趣向を凝らしたオンライン研修会も企画し、会員特典の充実と、新たな会員確保につなげていきます。

（2）幼保小連携プロジェクト「つながるまなざし研究会」活動の拡大へ

学習院大学の秋田喜代美先生、武蔵野大学の箕輪潤子先生、東海大学の寶來生志子先生を中心に、現役の4人の教員・保育者とともに2022年度に発足した「科学する心」の幼保小連携プロジェクト「つながるまなざし研究会」。2024年度に京都市、名古屋市、会津若松市で開催した「つながるまなざしカフェ（保育者と小・中学校の教員がお茶やお菓子をいただきながら、園や学校の実践を見せ合ったり、子どもたちの姿について話し合ったりする場）」が非常に好評で、口コミから、自園・校で開催したいという声も増えています。そのため、「つながるまなざしカフェ」を現場の先生が企画・開催・運営するための助成プログラム（上限5万円）を創設し、規約や必要書類等を整備しました。2025年度はより多くの地域でこうしたイベントを開催できるよう、普及・拡大に向け、積極的に活動していきます。また、本活動の理解を多くの方に深めていただけるよう、「科学する心」の幼保小連携に関する新たな冊子の制作と配布を予定しています。

2. 子ども科学教育

（1）ミライティーチャーズアカデミー

「トップリーダー研修会」を「ミライティーチャーズアカデミー トップリーダーコース」と改め、当財団主催研修として広く参加者を公募して「第3期」を開催しています。全体テーマとして「2050年に子どもたちが自分らしく生きられるように、あなたたちは何をしますか？」を掲げ、期間は2024年6月～2025年8月までの14ヵ月間を予定しており、8月3日に公開での成果発表会を開催する予定です。

（2）SSTAとの連携による授業研究の向上

SSTAはソニー教育財団の理念に賛同し、実現のために実践を推進する先生方の任意団体で、全国に40支部、約1,300名の会員を擁しています。自治体の枠を越えて全国の教員がつながり、教育実践論文の主題である「科学が好きな子どもを育てる」を共通のテーマにした授業研究や研修会の開催など独自の活動をしています。

授業研究の最高峰を目指す「エリア研修会」では全国を6つのエリアに分け、複数の支部が合同で「科学的な思考による学びを深め、次代の理科教育を創造する」ことを研究するもので、集合形式の研修会が各エリアで開催

され、エリアの特色にあわせた授業研究を1年サイクルで行っています。2025年度も授業経験の少ない若手教員の育成に重点を置いた若手研もエリア単位で企画/実行される予定で、財団としても継続して支援していきます。

以 上